

# 日中両言語における同じ漢字を用いた動詞の表す それぞれの意味領域の差異に対する比較研究 ——日本語動詞「飲む」と中国語動詞「飲」を中心に——

戴 政宇

(国立台湾大学・日本語日本文学研究所・院生)

## 1. はじめに

### 1. 1 本稿の目的と研究手順

台湾における中国語母語話者の日本語学習者によく見られる日本語の誤用法のほとんどが母語の干渉による過剰一般化 (overgeneralization) によるため、日中両言語における同じ漢字を用いた動詞が表すそれぞれの意味領域の差異に対する知識が乏しいことが原因であろう。そこで、本稿は、日中両カ国における同じ漢字を用いた動詞の内、日本語動詞「飲む」(以下「飲む」と略称する)と中国語動詞「飲」(以下「飲」と略称する)の表す多義性を分析した上で、「飲む」と「飲」が表すそれぞれの意味領域を比較研究して、両者の間に存在する差異を明らかにすることを試みる。

研究の手順としては、第一に、「飲む」及び「飲」が実際にどのように用いられているのかを、文例を呈示しながら考察し、認知意味論に基づいて「飲む」と「飲」が表すそれぞれの語の概念を形成する中心的な意味特徴であるプロトタイプを抽出する。<sup>1</sup> 第二に、プロトタイプに基づいて、「飲む」と「飲」の基本義を確定した上で、「飲む」と「飲」がどのように意味拡張してそれぞれの語の表す多義性を示すか、を分析・考察する。第三に、「飲む」と「飲」のそれぞれの語の表す多義性を比較分析して、それらの意味の内、「飲む」と「飲」の表す多義的別義が意味的に相互に重なり合うものと、意味的にズレが存在していて独自の意味を示すものとを分類して、「飲む」と「飲」の表すそれぞれの意味領域の差異を明らかにする。

尚、本研究の対象として用いる中国語は、現代の中国語圏において共通語として認められている「北京語」であり、台湾では「国語」に該当する。<sup>2</sup> また、日本語動詞の「飲む」と「飲」両方の意味領域を比較するために使う文例は、主に、日本語の辞書類、「青空文庫」、「朝日新聞」(日本語の部分)、「中央研究院現代漢語標記語料庫」、及び「中時電子報」(中国語の部分)から採録したものを用いる。

### 1. 3 先行研究

動詞の多義性に関して、吉村は「ひとつの言語形式が関連する二つ以上の意味をもつことを多義性と呼ぶ」<sup>4</sup>と定義し、国広はさらに「同一の現象素<sup>5</sup>に基づいているか、同一の抽象概念に基づいている場合に多義を構成する」<sup>6</sup>と付け加え、そうでない場合は同音異義語であると説明した。原義との関連の有無が多義語と同音異義語を見分け方になると考えられるが、現段階では、両者の見分け方に対する定説は未だ確立されていない。国広説が導入した「現象素」という概念は、認知的な観点を大幅に利用し、この行き詰まりを打開する糸口を作り出し

<sup>1</sup> ジョージ・レイコフ著、『認知意味論—言語から見た人間の心—』、1987年、池上嘉彦・河上誓作他訳、紀伊国屋書店、p. 752—p. 754。

<sup>2</sup> Christine Lamarre「助詞への道—漢語の“了”、“得”、“倒”の諸機能をめぐって」、大堀寿夫編『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』、2002年、東京大学出版会、p. 186。

<sup>3</sup> 『三省堂 スーパー大辞林』CD-ROM版

<sup>4</sup> 吉村公宏(2004)『はじめての認知言語学』研究社、p. 96。

<sup>5</sup> 国広哲弥(2006)『日本語の多義動詞—理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店、p. 5。国広によれば、「現象素は言語以前の存在物であり、それを人間の立場からどのように認知するかによって異なった意味が涵中に生じると考えるのである。」

<sup>6</sup> 国広哲弥『日本語の多義動詞—理想の国語辞典Ⅱ』2006年、大修館書店。

た。また、多義的別義の分析について、「それぞれの意味に意味の異なる別々の関連語(反義語、類義語、上位語など)が対応することから、その複数の意味は意味が異なるということが導ける」<sup>7</sup>と見る初山説は多義性の分析方法に肯定的な光を与えてくれるものである。しかし、日本語の動詞の多義性の分析に関する論文は、国広、初山、謝豊地<sup>8</sup>により発表されているが、未だ数少なく充分ではない。加えて、日本語の動詞と中国語の動詞の表すそれぞれの意味領域を比較分析した論文は、台湾においては謝豊地の発表した数編のものが知られているに過ぎない。そのため、(1) 認知意味論に基づいて、日本語と中国語における同じ漢字を用いたそれぞれの言語の「語」の表すそれぞれの多義的別義の違いを明らかにすること、に加えて、更に、(2) 日中対照言語学的な研究方法によって、それらの多義的別義が形成するそれぞれの意味領域の差異に対する比較研究は入り口の段階にある。そのため、日中両言語による「語」の表す意味領域を対照的に分析するには参考資料がまだまだ不十分だと思われるのである。

本稿は、日本語動詞「飲む」と中国語動詞「飲」が表すそれぞれの多義的別義を明らかにすること、そして、それらの多義的別義が形成する意味領域の差異の比較というテーマの下に分析し比較研究する。

## 2. 日本語動詞「飲む」と中国語動詞「飲」の表す意味領域の差異に対する意味論的比較分析

日本語動詞「のむ」の辞書上の表記法については、「飲む」と「呑む」とが同じ項目で一緒に述べられていることが多い<sup>9</sup>。「呑む」の表す概念について『明鏡国語辞典』では、

「呑」は「丸のみにする」、「ぐいぐいのむ」の意味合いで、「丸薬を呑む」「大酒を呑む」「蛇[波]が蛙[舟]を呑む」「短刀を呑む」「敵を呑む」「条件を呑む」「息を呑む」などと記される。一般には「飲む」でまかなうが、まかないがたいとしてかな書きにすることも多い。

とされる。「呑む」のほうは「丸ごと、つまり生物の食道に対して一定の体積を持つ固体を体の中に入れて、またはそこから抽象化しいろんな形のないものを取り入れるという意味特徴を強調する」と説明されている。『呑む』で表すものも一般的には『飲む』でまかなうという叙述に基づく、「呑む」と「飲む」の間の使い分けはあまり明確ではなく、両者は意味的にはある部分が重なり合っていて、意味的に連続性を示す関係を成していると考えられる。従って、本稿のテーマは日中両言語における同形の漢字を用いた「語」の表すそれぞれの意味の差異に対する分析であるため、「飲む」と「呑む」の意味的な関連性に関わる『明鏡国語辞典』による上記の引用部分の説明に基づき、本稿で用いる文例の部分は全て「飲む」で表示する。また、もし、実際の言語生活のなかで「呑む」を用いて表現する傾向が強い場合に限って、特別に『呑む』が用いられる傾向が強い」という注を付け加えることにする。尚、日本語の文例に対応する中国語文は「→」によって日本語文の右側か下に記述される。中国語文に対応する日本語文もこれに従って記述される。

### 2. 1 日本語動詞「飲む」の多義性に対する意味分析

#### 2. 1. 1 「飲む」の表す基本義(多義的別義[1])

「飲む」の概念の解釈として、日本語辞書全般に亘って第一項目に立てられているのは、「水を飲む」の意味を表すような「液体を喉に流しこむ」という意味である。<sup>10</sup> 下記を見られたい。

<sup>7</sup> 初山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』研究社、p.102。

<sup>8</sup> 謝豊地正枝(2006)「動詞『切る』の示す多義性に対する意味論的分析と考察」『認知言語学国際シンポジウム論文集2』、台湾国家科学委員会・台湾大学日本語文学系出版、(2007)『同形の漢字で表される中国語の動詞と日本語の動詞による個々の意味領域の差異に対する意味論的比較研究—「打」と「打つ」、「切」と「切る」、「洗」と「洗う」を中心に—』(国家科学委員会仙台研究奨励受賞論文)台北・凱倫出版社、p.1—p.108、など。

<sup>9</sup> 『広辞苑』第五版、『三省堂スーパー大辞林』、『国語大辞典』、『明鏡国語辞典』、『学研 パーソナル現代国語辞典』、『学研国語大辞典』(以上は全部CD-ROM版)のいずれにおいても同一項目で扱われる。

<sup>10</sup> 文例を用いて分析する場合、まず該当する語を含む文を呈示し、下に中国語の翻訳を付記する。基本的に「飲む」と「飲」を翻訳の形でなるべく併記してその語の概念を対照分析するが、もし中国語に直訳できない場合には、より適切な中国語の語・言葉を使って直訳する。そして、後ろの括弧に交替可能な語彙を添える。

(1) 澄んだ水を飲むことになったので、上機嫌である。(森鷗外『寒山拾得』)

→由於飲(喝)了乾淨的水, 心情變的極好。

において、「飲む」の概念は、<生理的な渇きを満たしたいという欲求を満足させるために><自ら対象の液体に近づき、手、或いは、ほかの道具を使って><液体・水を口から喉へ流しこんで腹の中に入れる行為>によって形成される「飲む」である。これらの意味特徴の内の<液体・水を口から喉へ流しこむ行為>の部分是最も中心的な核を成す概念を含んでいるプロトタイプである。(1)文に対応する中国語文中の「飲」の概念も同じ意味特徴によって形成されていると分析できる。

2. 1. 2 「飲む」の多義的別義[2]

下記の(2)文中の「飲む」にはシネクドキーによる意味的拡張が見出されるので、この場合の「飲む」は多義的別義[2]に意味的に変化していることと考えられよう。

(2) この時、小野川はもういい年であったが、気負いの面白い男でよく飲む。(中里介山『大菩薩峠』) →當時的小野雖已上了年紀, 但仍然非常有精神且為人風趣, 因此很會喝酒。

における「飲む」は「酒を飲む」の意味を表している。「酒」は液体の一種で、つまり「類」と「種」に基づくシネクドキー表現であるため、シネクドキーの意味的拡張によって「飲む」が「酒を飲む」という多義的別義[2]を派生したものと認められる。

2. 1. 3 「飲む」の多義的別義[3]

(3) スイカの種を飲んでしまう。(『三省堂 スーパー大辞林』) → 吞下了西瓜的種子。

におけ「飲む」は<ある一定の体積を占める固形物を><嚙まずに口から喉にのみ(流し)込んで腹の中に入れる>という意味特徴によって形成される概念である。「飲む」の基本義を形成する意味特徴と比較すると、同じ意味特徴の共有度が高い。「飲む」の対象物は「液体」から「固体」になったが、<嚙まずに口から喉にのみ(流し)込むこと>という部分に焦点を合わせると、この別義[2]は基本義を支えるプロトタイプから部分転用<sup>11</sup>して意味拡張し、派生したことになる。注意すべき点は、対象物が「固体」の場合には、対応する中国語の動詞は「飲」ではなく「吞」と変化する点である。もう一つの例を考察する。

(4) Aは到頭我慢が出来なくなって、もう一度薬を飲むことにした。(渡辺温『花嫁の訂正- 夫婦哲学-』)  
→A 最後還是忍耐不下去, 決定再吃一次藥。

「薬を飲む」は頻繁に用いられる名詞と動詞の組み合わせである。<sup>12</sup> 薬は主にカプセル・丸薬などの固形物を指すが、「薬を飲む」に対応する中国語の動詞は「吃(日本語訳では「食べる」に相当する)」である。つまり、中国語の用法では、日本語の「(薬を)食べる」という意味の「吃」という動詞に切り替えて用いなければならない。言い換えれば、中国語母語話者の場合には、「薬を食べる」と誤用するわけである。以上の分析と考察に基づく、<固形物を嚙まずに口から喉に流し込んで腹に入れる行為>に対しては、中国語は「吞」または「吃」を用いて表現する。「飲む」に対応するには、中国語の動詞は「飲」「吞」「吃」の三種類を使い分ける必要がある。それは「飲」が意味的に細分化されており、それに依拠して、「飲む」と「飲」の表す意味概念の間には差異があることが分かる。

2. 1. 4 「飲む」の多義的別義[4]

<sup>11</sup> 国広哲弥(1982)「部分転用：語義特徴の一部のみが用いられ、他は抑圧される場合である。」「意味論の方法」大修館書店、p.114。

<sup>12</sup> 手元にある辞書を調べると、「飲む」の意味説明に「薬を飲む」はよく文例として取り出される。

- (5) 男は長椅子に掛けて、其処にある煙草を飲まうとして居た。(与謝野晶子『午後』)  
中国語訳→男人坐在椅子上，一副正要準備吸煙的樣子。(抽)。

における「飲む」は<気体を口の中に吸い込んで><その気体を口から喉の中に吹き入れて充満させる行為>という意味特徴によって形成される「吸う」の意味を指す。(5) 文中の「飲む」の動作は、基本義の動作と異なるが、解剖的な視点から考察すると、<気体を嘔まずに口から喉に吹き(流し)込んで腹の中に入れる>などの類似性を認めることができる。「飲む」の別義[4]は対象の違いにより人体に取り入れる方法に相違点が生じる点において、固形物が対象語である場合と意味的な変化のプロセスが同じであり、基本義を支えるプロトタイプから部分的な転用したものと判断できよう。また、中国語では、対象語が気体である場合には、「飲」を用いず、「吸」と「抽」などの二つの動詞によって表現することが分かる。

## 2. 1. 5 「飲む」の多義的別義[5]

- (6) アトランチス大陸が、津波に飲まれてしまう。<sup>13</sup> (海野十三『洪水大陸を呑む』)  
→雅特蘭提斯大陸被海嘯給呑噬。

において、(6) 文中の「飲む」が表す概念は、<海流などの大きな流れなどの液体に><自分または他者がのみ込まれる動作・状態>といった二つの主要な意味特徴から組み立てられており、受身の形で使われることが多い<sup>14</sup>。この多義的別義の動作主に相当する名詞は人間などの意志或いは生命を持つ存在ではなく、津波や海流といった液体が生物を含む具象物を「のみ込む」場合に用いられる。意思の無い液体がまるで人間のように口を開けて、口腔の中で何の作用も加えず直接「動作主(津波)の内側に呑み込んで包み込む」という一連の動作に準じて表現できるのは、基本義と「形態(外見)」上の類似性による。多義的別義[5]はメタファー的意味拡張に基づいた意味概念を派生させて、「擬人法」<sup>15</sup>の表現を形成している。

## 2. 1. 6 「飲む」の多義的別義[6]

- (7) 闇に飲まれる。(『三省堂 スーパー大辞林』) → 被黑暗呑没。

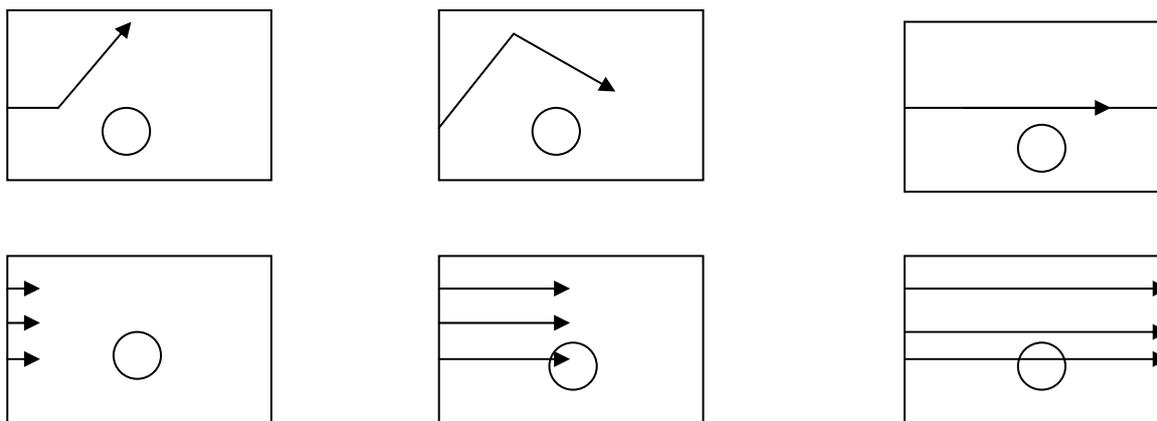
別義[6]の表す概念は、<自分または他者が意志のない空気・気体により包み込まれる状態・さま>という意味特徴によって形成される「包まれる」という概念である。この場合、受身の形が常用されるのは明らかに多義的別義[5]から受け継いだ意味特徴と思われるが、「呑み込む・包み込む」動作をする動作主の性質的な違いが両者を弁別する。前項の(6)文においては、「動作主(津波)はまるで人間が口を開けたかのように波を口のように大きく広げて、動作主以外の具象物を自分の内側に呑み込み取り込んだ」後で、口を閉じたように再び平穏な状態に戻る。(7)文中の抽象的な「闇」は均質的に自分の領域を音も無く広げていく。闇はその辺りに存在する全てのモノを「飲み」尽くした後でも元の状態にも戻らず、すでに自分の支配下に納めた空間をそのままにしているのである。(6)文中の「飲まれる」と(7)文中の「飲まれる」の意味的な差異に関しては、下の連続している三枚の「イメージ・スキーマ図」を参照されたい。

<sup>13</sup> 2.1.0. で述べた原則に則り、原文「アトランチス大陸が、津波に飲まれてしまう。」に「飲」を当てた。

<sup>14</sup> 三省堂『スーパー大辞林』より

<sup>15</sup> 吉村公宏(2004:100)は意志のないものを、まるで意志をもった人間の行為のように喩えて言うことで、抽象的な感情を分かりやすく理解しようとするのは「擬人法」であると説いている。

「図 1」 「イメージ・スキーマのAの組み合わせ」三枚の連続しているスキーマ図



上記の「図1」の「イメージスキーマ」は、上部三枚の組み合わせが「飲む」の別義[5]の概念である(6)「アトランチス大陸が津波に飲まれてしまう」文中の「飲まれる」の概念を示し、下部の三枚の組み合わせは「飲む」の別義[6]の概念である(7)「闇に飲まれる」文中の「飲まれる」の概念を示す。また、この「図1」に基づけば、多義的別義[6]が「飲む」の基本義から直接的に意味拡張したというよりは、むしろ、多義的別義[5]から拡張して意味的に派生した新しい概念であると考えられることを指摘したい。

## 2. 1. 7 多義的別義[7]

(8) 五万の観衆を飲んだ国立競技場。<sup>16</sup> (『三省堂 スーパー大辞林』) → 容納五萬觀眾的國立體育場。

において、別義[7]の「飲む」は施設の容量に関わる特性を表現する。ここは別義[6]と同じ、別義[5]から擬人法という表現を継承し、意志の無い施設を主語に立て、意志のある観衆を「受け入れる」ことを意味する。別義[7]はさらに別義[5]におけるスペースの概念に集中し、建物の受容力という認識を生み出すに至った。いわゆる「焦点化」<sup>17</sup>のプロセスに基づいて別義[5]より意味転移したことが分かる。

## 2. 1. 8 「飲む」の多義的別義[8]

(9) あいつは初めから相手を飲んでかかる。(『三省堂 スーパー大辞林』)

→ 從一開始他就用氣勢壓倒對方(嚇唬)。

(10) 会場の雰囲気に飲まれてしまう。<sup>18</sup> (『三省堂 スーパー大辞林』)

→ 被會場的氣氛給壓倒(嚇到)。

における別義[8]の概念は、「見くびる」、「圧倒する」という意味である<sup>19</sup>。文例(9)中の「飲む」の表す概念は、<相手を負かすなどの目的により><高圧な態度で実際なにか形のある攻撃に出る前に><相手を怖がらせる行為>といった三つの意味特徴によって形成される「見くびる」である。受身文の(10)は、<会場の建築様式、出席客の構成、内装のデザインなどの要素により><自ら心理的な圧迫を感じる事>によって形成される「圧倒される」という概念である。この別義において「飲む」という動作を行使する動作主は、いずれも<ある圧迫する支配的で特殊な状況・空気を生み出す動作主が><対象に精神的な負担をかける行為>等の共通する意味特徴を共有している。別義[6]と照らし合わせると、<対象物が存在する空間は見えない物質、つまり一種の「空気」によって覆いかぶさる>という意味特徴が共通することが見出せる。スペースを占めることにより、対象に心理的に働きかける多義的別義[8]は一層抽象化された表現と考えられよう。

<sup>16</sup> 2.1.0で述べた原則に則り、原文「五万の観衆を一んだ国立競技場」に「飲」を当てて表記してある。

<sup>17</sup> 国広哲弥(2006)『日本語の多義動詞』大修館書店 (P14)

<sup>19</sup> 『広辞苑』第五版。

中国語訳の場合、二つの文はいずれも「壓倒」という動詞で対応できるが、(10)の部分は「擊潰」より聊か不自然なため、候補の括弧内に置くこととする。

## 2. 1. 9 「飲む」の多義的別義 [9]

- (11) この場合、涙を飲んでストライキは思い止める方が諸君の為だ。(永崎貢 『組合旗を折る』)  
→在這樣的情況下大家還是飲泣取消罷工的好。(含涙)

における「飲む」が表す概念は、<ある事件が原因で生じた悔しさにより><涙が出そうになることを無理こらえて押しとどめて><結果として諦める行為>という意味特徴によって形成される「ある感情が表面化するのを無理にこらえて押し殺し止めて諦める行為」である。「悲しさ」ゆえに「涙」が流すという因果関係が成立するため、「涙」を「飲む」ことにより悲しさという感情を表すことから判断すると、別義[9]はメトニミーに基づいて基本義から拡張された意味ということが分かる。類似した概念を表す表現に「恨みを飲む」がある。前項の多義的別義の分析において、中国語の「飲」という動詞は日本文において用いられる「飲む」の概念に多くの状況表現に対応できないため、別の動詞を用いて表現しなければならぬ場合が多いことを指摘した。しかし、別義[9]の場合は、反って、日本語の「飲む」に難なく対応している言語現象が面白い。「飲む」と「飲」が同じ意味を表現できる割には、共起できる対象語の幅が広くないような感を受ける。この発見に関しては、後の項において更に分析する。

## 2. 1. 10 「飲む」の多義的別義 [10]

(12) 人々は息を飲んで眼を見あわせた。(岡本綺堂 『父の怪談』)<sup>20</sup> →人門摒息相對(忍住憋住呼吸)  
における別義[10]の表す概念は、<出すべき呼吸を何かの原因によって飲み込んだように><喉元で無理に押し止どめる行為>という二つの意味特徴によって形成される「呼吸を喉元で無理に押し止どめる」概念である。このような動きに導かれた原因を探ると、<外在または内在的な事柄により><動作主が精神的・肉体的に緊張した状態に陥って発生する行為>という感情的な変化に起因する点に辿り付ける。別義[9]と同じ「気持の推移と肉体的反応の間で因果関係が認められる」ため、多義的別義[10]は別義[9]からメタファー的に拡張したものと判断する。この別義[9]と類似する他の表現としては「固唾を飲む」がある。

## 2. 1. 11 「飲む」の多義的別義[11]

- (13) 「二つの条件を飲んでもらえたら(出馬を)考える」(朝日新聞2009年7月2日17時20分の記事)  
→若能接受這兩個條件我願意考慮(參選)。

において、別義[11]の表す概念は、<相手が出した条件または要求を><腑に落ちないとはいえ受け入れる行為>という意味特徴によって形成される比喩的な意味を指す。別義[11]の「飲む」の概念に内包される「『飲む』ことによって生じる動作主本人の情緒的变化」という要因に焦点を合わせると、別義[9]との間に存在する類似性は浮き彫りになると考えられる。別義[11]は、相手の求めに応じると「不満感」・「憂鬱」な気分が沸いてくる。別義[9]の場合は、具体的な涙といひ、抽象的な恨みといひ、それを無理やり押し殺したらマイナスな気持ちも生じてくる。両者はこの共通する意味特徴によりメタファー的意味拡張のプロセスが見出せる。

この別義[11]に対応する中国語の動詞が「接受」であり、「飲」によって対応させることが不可能である。それは、中国語の動詞である「飲」の対象語として、相手の「頼み」または「要請」が用いられている文例は未だに例を見ないのが原因の一つである。

## 2. 1. 12 日本語の動詞「飲む」の表す多義性に対するまとめ

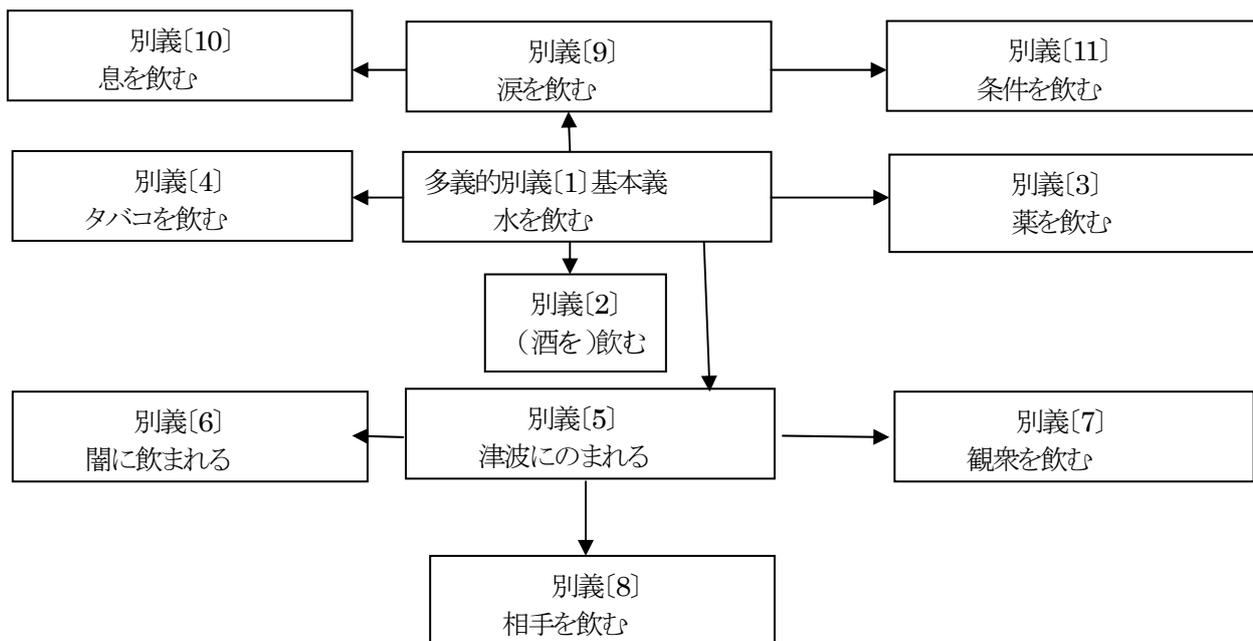
以上分析した「飲む」の多義性の外にも、次の例があることを付記しておきたい。

<sup>20</sup> 文例(11)の原文「人々は息をのんで眼を見あわせた。」

- (14) 刃物などを隠し持つ。「ふところに**七首(アイクチ)をのんでいる**」「**どすをのむ**」  
 (15) ごまかして自分のものにする。「乗り込んで、糸屋の**身代のんだ上**」「歌舞伎・心謎解糸系」<sup>21</sup>

などの多義的別義であるが、現代の日本語ではこれらの「のむ」は稀にしか使わない古い表現である。まとめとして、この項で検討した「飲む」の基本義及び多義的別義を整理し、「図2」に図示する。

【図2】 動詞【飲む】の多義構造



このモデルの中央に位置するのは分析の起点となる基本義で、そしてシネクドキーという比喻作用に基づき別義 [2] が派生された。基本義と平行的に左右に置かれた別義 [3] と [4] はいずれもく口の中でなにかの作用も加えずに現実世界のものを人体に流し込むという共通する意味特徴で基本義に一番近いところにある。別義 [5] [6] [7] は中核の意味用法とは違い、主語は自己意志のない物質として、ある対象を自分が支配する領域に取り入れるのであり、すでに分析した通り擬人法に属している。この三つの別義はくなんらかの作用も加えずに主語の支配するスペースに取り入れたという意味特徴で互いが繋がっている。別義 [8] [9] [10] というグループを一言で語れば、字面の意味ではなく比喩的な使い方でもとめられる。三項目はどれも一種の感情的変化を伴った (8の驚き、9の悲しみ、それと10の不満感) が、意味拡張の関係は異なっている。別義 [9] は時間的隣接性に基づき、基本義とメトリミー的に結びついたのである。別義 [10] は別義 [9] と意味的派生の仕方が同じという類似性に基づいて関係付けられる。別義 [11] は別義 [9] との部分的類似性によりメタファー的意味拡張と判断できよう。最後の別義 [8] は別義 [5] と対照すると、く雰囲気により人などの対象を自分のスペースに巻き込むという意味特徴が共通するので、意味転移の関係が定められる。

## 2. 2 中国語における動詞「飲」の多義性に対する意味分析

### 2. 2. 1 中国語の動詞「飲」の表す基本義 [1]

中国語の動詞「飲」の基本義の表す概念は、日本語の場合と大体同じで、くある生理的な欲求(渴き)を満足させるためにく自ら対象の液体に近づき、手、或いは、ほかの道具を使ってくそれを噛まずに口から喉に流し込んで腹へ入れるくなどの意味特徴によって形成される。この点について以下の文例中の「飲」の概念を分析

<sup>21</sup> 三省堂 『スーパー大辞林』より

する。

- (16) 他們飲了香檳，方才覺得人生活在玫瑰花色當中。(中央研究院現代漢語標記語料庫)  
日本語訳→シャンパンを飲んではじめて自分達がバラ色の人生を送っている事に気づく。

において、液体のカテゴリーに入るシャンパンを「飲む」の意味を表す中国語の動詞「飲」は、そのまま日本語の「飲む」によって意味的に対応できることが分かる。この用法によって両言語の動詞の基本義の表す意味領域はほぼ等しいと断定することが出来る。

## 2. 2. 2 「飲」の多義的別義 [2]

- (17) 他們去喝酒前都會用手沾兩三滴酒洒在地上，代表先孝敬祖先，請祖先同飲之意。(中央研究所現代漢語標記語料庫)  
日本語訳→彼らは酒を飲む前にまず酒を二、三滴地上に撒くが、それはご先祖様に敬意を表して、一緒に飲んでいただくことを意味する。
- (18) 那些有的沒有的牽掛與追求，遠不如這樣的春天痛飲幾杯，忘懷一切。(侯吉諒 人間詩選 精臨「蘭亭序」)  
日本語訳→形のあるもの無いものを追い求めるより、こんな春うららの日に痛飲し、なにもかもを忘れたほうがましだ。

において、中国語の「飲」の別義 [2] は日本語の「飲む」の別義 [2] に相当し、大体の意味特徴は基本義から継承し、対象語の部分だけは「酒」に絞られたという理由で対象語も必要ない。この点において日本語の別義 [2] もぴったりと当てはまり、同じ概念を表すことが分かる。日本語の動詞の「水を飲む」に対応する中国語の動詞には「飲」以外にも「喝」があり、「飲」と意味的にかなり重なる。基本義及び「(酒を) 飲む」というシネクドキー的な特殊化された用法も重なっている事が分かる点は既に指摘した。<sup>22</sup>

## 2. 2. 3 「飲」の多義的別義 [3]

- (19) 上季財報 大摩、富國銀行報喜 波音飲泣 (2009 年 10 月 22 日 「工商時報」)  
日本語訳→前年度の年間純利益に関する財務報告によると、大摩、富國両銀行は(利益があったという朗報を手にしたが、ボーイング社は(損益が出たというので) 悔し涙を飲んだ。
- (20) 享一時之樂，飲終身之恨。(中央研究院現代漢語標記語料庫)  
日本語訳→一時的な快樂を貪るんがため、一生恨みを飲む羽目となった。

において、以上の二つの文例を見ると、「飲む」の多義的別義 [10] と直結することが見出せる。「飲恨」と「恨みを飲む」、「飲泣」と「涙を飲む」といった二組みは前項における意味分析ですでに明らかにしたように、相互の意味関連性が強くて、ここでもう一度比較することにより一層説得力のある指摘になる。

一方、中国語の「飲」は「泣」より「恨」との接続頻率が高いという指摘もあって<sup>23</sup>、筆者が実際検証した結果もこの論点を証明し、支持することになる。<sup>24</sup> 日本語動詞「飲む」の多義的別義 [9] が表す意味概念の分析結果に従うと、メトニミーという換喩関係により基本義から意味的移転が発生したと判断出来る。

## 2. 2. 4 「飲」の多義的別義 [4]

<sup>22</sup> 中央研究院現代漢語中文詞彙網路より抜粋

<sup>23</sup> 中央研究院現代漢語中文詞彙網路、「飲」の多義的別義 3 より

<sup>24</sup> 「中時電子報」において「飲泣」は5項目で「飲恨」は144項目。「蘋果日報」では「飲泣」は2項目で「飲恨」は384項目となる。(アクセス日付 2009年11月15日)

- (21) 一所中學的 18 歳中學生槍殺 8 人後、飲彈自盡。(中國時報 2009.03.12)  
日本語訳→ある中学校の 18 歳の中学生が 8 人を銃殺した後、銃を自らの口中に入れて(弾を)撃ち自害した。

における「飲」の表す概念は、<自殺するという目的で><銃口を自らの口中に入れて><銃身にある引き金を引くことにより弾が喉頭を貫通した結果自殺する行為>という意味特徴によって形成されていることが分かる。基本義の「飲」は対象を実際に口から喉へと液体を流し込んで体の中に入れる行為を指すのに対し、別義[4]は、動作主が自害する(或いは、自殺する)ために、主体的に銃を自らの口中に入れて喉に向けて撃つ行為を指す。この動作が実際に実現されれば、「結果として、動作主は必然的に死ぬ」という事実こそ別義[4]の真意であると見なせよう。意味拡張のパターンという観点から考えれば、「動作主は主体的に銃を自らの口中に入れて喉に向けて撃つ」、「その結果、動作主は必然的に死ぬ」という「因果関係による」メトニミー的意味拡張によって、「飲」の概念が派生していることが見出せる。この中国語の「飲」の多義的別義は、文学作品以外、日本語の通常の表現法・用法として用いられることは非常に稀であろう。

また、「弾」は固形物のカテゴリーに属し、それを「飲」場合、中国語では「飲彈」と表現できる。しかし、前項において日本語の動詞である「飲む」の多義的別義を分析した時すでに触れたが、中国語の動詞の「飲」は日本語の「飲む」と比べると、固形物を対象語に用いることへの容認度はかなり低いという本稿の主張を文例で証明した。そのため、「飲」の別義[4]の概念を表現する(19)文は、いくら対象物が固形の具象物であるとはいうものの、それを字面的に「実際に喉を通して飲み込んで、体内に入れる」のではなくて、あくまでも比喩的な表現であることを指摘しておかねばなるまい。加えて、中国語の「飲彈自盡」の日本語の訳について考察すれば、日本語では「弾を飲む」とは翻訳しない。「(動作主は)銃を口中に入れて(弾を)撃つ(方法によって)自害した」というように翻訳するのである。なぜならば、「弾を飲んだ」という日本語の表現は、通常、「(動作主は食物と)誤って弾を飲み込んだ(ために手術をしなければならなかった)」というような意味を表す時に用いられるからである。この事実によって、中国語の「飲」と日本語の「飲む」の表す意味に差異が見出され、両動詞がそれぞれ支配する意味領域にも差異があることが認められよう。

## 2. 2. 5 「飲」の多義的別義 [5]

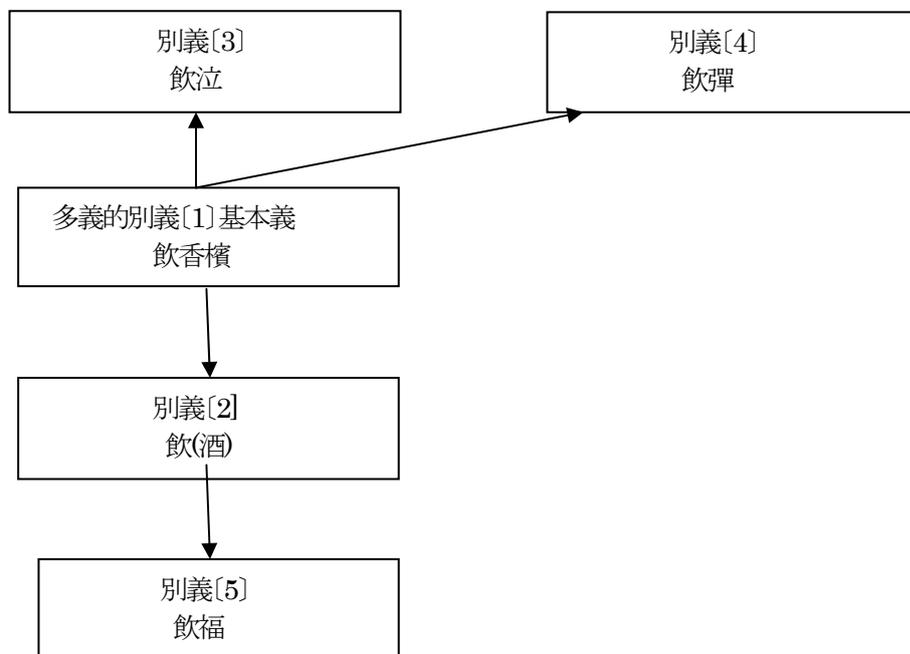
- (22) 由縣長楊秋興親自擔任正獻官，舉行啓扉、迎神、上香、獻帛、獻爵、獻花、飲福、受胙及送神等傳統祭孔儀式。(2009年9月29日付け「中國時報」)  
日本語訳→楊秋興県知事が自ら神官を勤めて、「啓扉」、「迎神」、「上香」、「獻帛」、「獻爵」、「獻花」、「飲福」、「受胙」、「送神」などの「孔子祭り」における伝統的な儀式を行った。

「飲福」という中国語の「飲」の別義[5]が表す概念を直接日本語で翻訳すれば、「福を飲む」という意味不明の訳語になる。「教育部重編國語辭典修訂本」の解釈によると、中国語の「飲福」とは、<神様のご加護をいただけるように><祭りの後にお供えの酒を飲む行為>を指すと説明してある。それに従えば、(22)文中の「飲福」は、「(神様のご加護をいただけるように)お供えしたお神酒(ミキ)をいただくこと」と翻訳できよう。また、「飲」という動詞に集中して考察すれば、<幸福な運命を手に入れるために飲んだり><または身にふりかけたりする行為>だという。そのため、基本義の概念を形成する<口から喉に液体を流し込んで体内に入れる行為>という意味特徴から、意味特徴のメタファー的な意味拡張に基づいて、抽象化によって意味転用した結果、<幸福な運命を手に入れるためにモノを飲んだり><または、何かモノを身にふりかけたりする行為>という「飲」の新しい別義が派生したと見られる。結果、新たに派生した「飲福」の「飲」の概念は、限りある人生を一つの入れ物(容器)に見立てて、「幸福」という抽象的な概念を「酒」という「液体」によってメタファー化し、入れ物(人生を指す)の中に注いでその酒(幸福を指す)を飲むことによって人体(容器)に液体(幸福)を<口から喉へと流し込んで体の中に入れる行為>をすること、すなわち、「幸福を口から喉へと流し込んで体の中に入れれば、幸福も同時に手に入る」というプロセスを象徴していることになる。この二つ元々違っていた領域に属する語義は、「容器のメトニミー」のイメージ・スキーマの写像作用により結びられている「メトニミー表現」と成っていると理解できるのである。

## 2. 2. 6 中国語における動詞「飲」の多義性に対するまとめ

以上の分析に基づいて明らかにしたことを、以下の「図3」に整理してまとめとする。

【図3】 動詞【飲】の多義構造



中国語の動詞「飲」は構成的に日本語と似通っていて、しかし支配する意味領域の範囲に差異が認められる。下記の分析で検討する。先ず中央の基本義からシネクドキ的に意味縮小し、そして対象語は同じ液体という原因で別義 [3] に意味拡張する。右上の別義 [4] は銃の弾を体に飲むことを意味するのではなく、「死亡」という概念を含意しているのである。要するに、因果関係に基づくメトニミー的意味転移を通じて、基本義と関連付ける。別義[5]は別義[4]と同様、メトニミーから意味転移されたが、変化の源は別義[2]という部分は別義[4]と異なる。

日本語の多義関係と照らし合わせると、中国語の「飲」は以下の特性に集約できる。

1. 動詞の主語に無意志の物質が立たない。
2. 気体は「飲」の対象にならない。
3. 使い方としては抽象化する度合いは日本語よりやや低い。<sup>25</sup>

### 3. 結論

結論として、日本語の動詞「飲む」と中国語の動詞「飲」の表すそれぞれの意味領域には差異が存在することを指摘する。そして、その差異は、中国語の「飲」の支配する意味領域の方が日本語の「飲む」の支配する意味領域よりも広いこと、また、「飲」の表す概念は「飲む」の表す概念よりも、より細分化されていること、これらの二点を本稿における意味分析と比較研究の結果、明らかにした。

### 4. 今後の課題

今回の研究に関しては、紙幅の制限のため、多義的別義の分析は凡そ現代的な用例に絞られ、使用頻率がより低い別義が漏れる可能性がある。それについては、また稿を改めて掘り下げることとする。そのほか、できれば、日本語と中国語における同じ漢字を用いた動詞の組み合わせの表すそれぞれの意味領域の差異に関して、より多

<sup>25</sup> 比喩的な使い方の数がより多いと、「条件」など概念的用語も動詞の対象として成り立つ日本語と比べると、中国語の「飲」は抽象度がそれほど高くないと判断できよう。

くの組み合わせが表す意味領域の差異に対する意味分析を比較研究する必要があることを今後の課題として提起しておきたい。

## 5. 参考資料

日本語の文献(五十音順)：

大堀寿夫編(2002)『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』東京大学出版会

国広哲弥(1982)『意味論の方法』大修館書店

国広哲弥(2006)『日本語の多義動詞』大修館書店

謝豊地正枝(2003)「シネクドキの分類法に対する認知意味論的考察」『台大日本語文研究5』台湾大學日本語文學系 P84-112

謝豊地正枝(2004)「動詞『はしる』の多義構造に対する分析」『台大日本語文研究7』台湾大學日本語文學系 P111-148

謝豊地正枝(2005)「動詞『騙す』及び『騙す』を巡る類義語群に対する位相論的意味分析」『台大日本語文研究8』台湾大學日本語文學系 P59-91

謝豊地正枝(2006)「動詞『打つ』及び中国語の動詞『打』の表す意味領域の差異に関する比較研究」

名古屋語彙研究会

謝豊地正枝(2006)「動詞『切る』の示す多義性に対する意味論的分析と考察」『認知言語学国際シンポジウム論文集2』国家科学委員会・台湾大學日本語文學系

謝豊地正枝(2006)「動詞『切る』の示す多義性に対する意味論的分析と考察」『認知言語学国際シンポジウム論文集2』台湾国家科学委員会・台湾大学日本語文学系出版

謝豊地正枝(2007)「『フレーム』の概念と機能に対する認知論的分析—動詞「塗る」「運ぶ」「置く」「沸かす」の作るフレームの機能に対する分析を中心に—」『台大日本語文研究11』台湾大學日本語文學系

谷口一美(2003)『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』研究社

谷口一美(2006)『学びのエクササイズ 認知言語学』ひつじ書房

趙順文「動詞『限る』とその派生語との核心義による語義展開図—基本文型と文法化を中心に—」『台湾日本語文学報26』台湾日本語文学会

初山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』研究社

吉村公宏(2004)『はじめての認知言語学』研究社

林慧君(2009)「字音形態素『～風』の接尾辞的用法—日本語と中国語の対照を通して—」2009年台大日本語文創新國際學術研討會

翻訳文献：

F・ウンゲラー/H・J・シュミット著 池上嘉彦訳(1998)『認知言語学入門』大修館書店

ジョージ・レイコフ著 池上嘉彦・河上誓作他訳(1987)『認知意味論—言語から見た人間の心—』紀伊国屋書店

ジョン・R・テイラー著 辻 幸夫ら訳(2008)『認知言語学のための14章』紀伊国屋書店

用例出典：

中央研究院現代漢語標記語料庫 (Academia Sinica Balanced Corpus of Modern Chinese) <

<http://dbo.sinica.edu.tw/SinicaCorpus/>>

中時電子報< <http://news.chinatimes.com/>>

青空文庫< <http://www.aozora.gr.jp/>>

『三省堂 スーパー大辞林』CD-ROM版

辞書：

『広辞苑 第5版 CD-ROM版』CD-ROM版

『学研 パーソナル現代国語辞典』CD-ROM版

『三省堂 スーパー大辞林』CD-ROM版

『新明解国語辞典』第五版 CD-ROM版

『日本語辞典』CD-ROM版

『明鏡国語辞典』CD-ROM版

『ハイブリッド新辞林』CD-ROM版